

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 12 月 16 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520631

研究課題名(和文) 短期型留学プログラムにおける修了研究の教育的意義と有効性

研究課題名(英文) Educational Significance and Effects of Completion Research in Short-term International Programs

研究代表者

R. PALIHAWADANA (Palihawadana, Ruchira)

京都大学・国際交流推進機構・教授

研究者番号：50303318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語・日本文化研修生(以下、日研究生)に対する全国アンケート調査、聞き取り調査、及び4大学の日研究生に対する3回に亘る日本語技能習得測定テスト、並びに日研究生担当教員に対する聞き取り調査を実施することを通して1年未満の短期型留学プログラムにおける修了研究の意義と役割について検討した。その結果修了研究は修了要件としての役割を果たしつつ、研究スキル・学術日本語の技能習得の方法、日本に対する理解を深める方法として機能していること、更には、少人数の日研究生を受け入れる大学において日研究生専用のカリキュラムの部分として個人ニーズを充足する方法としての機能を果たしていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Through a country-wide survey, hearing investigations and a sequence of achievement tests this project analyses the educational significance of completion research in one year international education programs such as the Nikkensei Program. It is used as a method of developing all-round academic abilities and specialized knowledge in addition to deepening knowledge on Japan. Programs adopting completion researches as criteria for acknowledging the completion are characterized by course designs having many supportive courses intended at developing research skills and Japanese language academic skills (4.13 courses in average). These help overcome difficulties in acquiring academic terminology while helping to get used to the style of academic argument in Japanese. However 69.23% of the program participants still find difficulties in writing academic reports in Japanese, implying the necessity of further research on teaching methods in academic report writing.

研究分野：日本語学・日本語教育学

 キーワード：日研究生 修了研究 日本語技能習得 アカデミック・スキル 研究能力習得 カリキュラム 修了要件
 国費留学制度

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語・日本文化研修留学生(以下、日研生)に対して2007年に実施した修了時全国アンケート調査では、何らかの修了研究課題に取り組んだ学生は81.95%にも上ることが明らかになった(『日本語・日本文化研修プログラム2007年修了時全国アンケート調査報告書』)。更に、2010年現在修了研究発表及び修了研究論文作成を義務づけている大学は受け入れ校56校中35校(62.5%)に達している(2010年度文部科学省コースガイド)。

このように修了研究は国費留学制度の一環として開設されている日研生プログラムのカリキュラムにおいて重要な部分として位置付けられており、日研生教育を特徴づけているものであると言える。

(2) しかしながら、日研生プログラムに代表される非学位取得型の、1年未満の学部レベルの短期留学プログラムにおける修了研究に関わる研究は見られず、その教育効果及び可能性について検証する必要性から本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は全国日研生プログラムを対象としながら、修了研究の実施実態、教育効果及び教育方法としての可能性を探究することを目的としている。

とりわけ、以下に挙げる四項目を調査し、明らかにすることが本研究の主たる目的である。

- (1) 全国日研生プログラムにおける修了研究の実施実態
- (2) 日研生教育の一環として修了課題・研究を設定することの必要性と教育的意義
- (3) 修了研究を通じた日本語運用力の育成方法
- (4) 修了研究を通じた日本との関わりの強化方法

3. 研究の方法

上述の目的達成のために本研究において以下の方法を採用した。

- (1) 文部科学省により毎年発行されている全国日研生受け入れ大学のプログラム概要が記載されている『日本政府(文部科学省)奨学金留学生 日本語・日本文化研修留学生コースガイド』の2011年度版の分析
- (2) 全国日研生に対する修了時アンケート調査の実施・分析

実施期間：2012年7月下旬～10月上旬
 対象大学数：48校(日研生が在籍していなかった8校を除いた全受け入れ校)
 回答者数：130名

- (3) 修了時日研生に対する聞き取り調査
 実施期間：2011年7月～2012年8月
 対象大学数：11大学
- (4) 日研生担当教員に対する聞き取り調査
 実施期間：2011年7月～2012年8月
 対象大学数：15大学
- (5) 4大学の日研生を対象とした習得度を測定することを目的とした3回に亘る合同日本語テストの実施・分析
 実施回数：3回
 対象大学数：4大学
 対象者数：73名
 実施期間：
 開始時テスト
 2012年11月12日～16日
 1学期終了時テスト
 2013年1月31日～2月15日
 修了時テスト
 2013年7月11日～31日

4. 研究成果

- (1) 全国日研生プログラムにおける修了研究の実施実態

日研生教育のカリキュラムの一環として修了研究を課している大学は全体の62.50%であり、何らかの課題を設定している大学は71.43%に上る(表1を参照)。

表1 受講大学における課題研究の設定の実態 (n=56)

課題設定の状況	大学数
修了研究としての課題研究を課している大学	35校 (62.50%)
修了要件になっていない課題研究を必修にしている大学	4校 (7.14%)
選択科目として課題研究を課している大学	1校 (1.79%)
プログラムの一環として課題研究を設定していない大学	16校 (28.57%)

課題のタイプとして「レポート」が最も多く、その他に「論文」、「研究」、複数課題の選択肢、「発表」、「報告書」が課せられている。

研究課題のテーマに着目してみると、特に制限がなく、学生が自由にテーマを選択できる大学が最も多く(11校)、日本語・日本文化、日本に関するテーマ、受講者の専門分野、卒業論文のためのテーマなどがそれに次ぐ。

(2) 日研究生教育の一環として修了課題・研究を設定することの必要性和教育的意義

カリキュラムとの関わり

全カリキュラム、あるいはカリキュラムの一部を日研究生専用に編成している大学の82.35%において何らかの課題研究を設定しており、しかも同様の大学の78.57%においてその研究が修了要件として位置付けられている。ここから日研究生のカリキュラムにおいて修了研究は「修了要件」としての重要な役割を果たしていることが窺える。

日研究生担当教員に対する調査では、修了研究を課す目的として、総合的能力の向上、技能・能力育成、特定分野の知識獲得、日本に対する理解の深化などが挙げられた。

一方、受け入れる日研究生数は数名で、専用のプログラムの編成は現実的でない大学において修了研究は個別ニーズに対応する方法として活用されており、プログラムの日研究生専用の部分として機能している。

更に、コースガイド分析を通して、修了研究は単独で導入されているわけではなく、課題研究を採り入れたカリキュラムにおいて研究遂行に必要なアカデミックスキル・研究スキルを養成する科目が平均的に4.13科目開講されていることが明らかになった。上述の目的で最も多く開講されているのは研究スキルを習得するための科目で、次いで日本語の文章作成技能習得を目的とした科目、その次に口頭発表技能を学ぶ科目が多かった。

しかしながら、課題・研究を全く課さない受け入れ大学も28.57%見られ、それらにおいて科目履修型のカリキュラムが採用されている。

日研究生担当教員の捉え方

日研究生担当教員に対して行った聞き取り調査では、修了研究の実施意義・効果について、日本語での論文作成・発表のための技能習得、論理的文章の作成のためのスキル習得、アカデミック・ジャパニーズの習得、研究方法の習得、課題解決能力の習得、論理的思考力の習得、総合的な力の習得及び日本についての多角的な視野の獲得に有効であるといった回答が得られた。学習負担は大きいものの、日本研究者養成のプログラムとして必須の要素として位置付けられていることが明らかになった。

日研究生の捉え方

一方、日研究生は修了研究遂行の総合的な教育効果として、「日本における研究方法・論文の書き方を学ぶことができた」(82.31%)、「ある分野について深く学ぶことができた」(80.00%)と回答しており、習得できた研究能力として「分析能力」(1位:65.39%)、「考察能力」(2位:63.08%)などを挙げている(日研究生に対して行った全国アンケート調査結

果に基づく)。

次節で述べるように研究遂行を負担として考えている日研究生は少なくない。しかし、日研究生のプログラムの一環としての修了研究の必要性について20.00%の日研究生は「絶対に必要」と63.08%の日研究生は「あった方がいい」と回答している(合計83.08%、全国アンケート調査結果に基づく)。その理由として「日本での1年間、何かをしたことの証である」、「修了研究を通じて日本文化に対する理解が深まる」、「日本語を磨くのに役立つ」、「交換留学生とは異なる研究生だから(必要)である。研究をして成果を出すべきだと思う。国費の学生は特に(修了研究が)必要だと思う。」などが挙げられており、日研究生プログラムの特色の一つとして位置付けられていることが明らかになった(日研究生に対する聞き取り調査に基づく)。

研究遂行上の課題

36.15%の日研究生にとり、研究の遂行は初めての経験であり、また40.8%の日研究生は負担として捉えていることが分かった。その背景に研究の進め方に対する不安や高い要求度に対する精神的なプレッシャーなどが見られる。研究を遂行する際に困難点として感じているのは、日本語での論文の書き方(69.23%)、論文特有の日本語表現(56.92%)、文献探し(56.92%)、引用の仕方(55.39%)、データ分析・考察方法(53.85%)等である(全国アンケート調査に基づく。複数回答可)。

更に、テーマ選定などにも困難を感じる学生が多く、担当教員からのより具体的な指導、チューターなどの日本人学生の補助を求めている。

論文特有の表現の習得に対する困難点として、それらの存在を認識していなかったことや存在の把握に時間がかかったことが挙げられている。それらに対する気づきの喚起並びに体系的指導の重要性が窺われる。

(3) 修了研究を通じた日本語運用力の育成方法

日研究生に対する全国アンケート調査結果において、習得できた日本語技能として日本語の論文作成技能(82.31%)及び日本語の文章表現能力(67.70%)が最も多かった。

その詳細を調査することを目的に本研究において4大学の日研究生を対象としながら、プログラムの開始時、中間(1学期終了時)及び修了時の3回に亘って難易度を統一した学術日本語の習得度合を測定するテストを実施した。全体的傾向として開始時と修了時の間に成績の上昇があり、とりわけ語彙習得において成績が上昇している。回答者を開始時テストの成績を基準に上位、中位、下位グループに分けて考察した結果、下位グループの成績上昇が最も顕著で、中位グループにおい

てもある程度の上昇が見られることが明らかになった。しかし、上位グループにおいて上昇が見られなかった。

本テストはパイロット調査的に実施したものであり、難易度の統一は十分に図れていない可能性がある。客観的な測定方法を確立した上でテストをやり直すことが本研究の今後の課題の一つである。

しかし、上級・超級学習者の学術日本語の上達を促進する必要性も本研究により示唆されたと判断できる。

語彙に関しては難易度の高い一般語彙及び「窺われる」などの論述表現の習得、論述表現の適切な産出、文体に適合した語彙選択などに課題が見られた。

今後分析を更に深めながら、具体的な課題を明らかにすることにより、教育の改善方法を模索していきたいと思う。

(4) 修了研究を通じた日本との関わりの強化方法

修了研究に取り組んだ日研生の 53.41%が原籍大学に復学した後、修了研究を進展させ、同一テーマで卒業論文を執筆すると回答している(全国アンケート調査に基づく)。故に、修了研究は日本での一年間の教育課程においてのみならず、日研生の学部教育の全学習課程において重要な部分を成していると考えられる。更に、「大学院教育の役に立つと思う」と回答した日研究生は 42.31%もあり、進路選択にも何らかの影響を与えるだろうと考えられる。

以下の回答が示すように日研究生に対して実施した聞き取り調査では日本に対する理解を深める方法として位置付けていることが明らかになった(「修了研究を通じて日本文化の理解が深まる」「日本という国を知りたいなら、日本について深く研究しなければならない」「日本社会・文化を学ぶ一つの手段である」)。

その上、研究遂行の過程においてチューターはもとより、日本人学生や地域の人に協力してもらった場合が多く、交流のきっかけとしての役割を果たしている。

また、担当教員に対する聞き取り調査でも「日本でなければならない」テーマが多い点から、日本というフィールドを生かしていると言えることや修了研究を通して日本人学生とディスカッションする機会となっている点が挙げられた。

以上述べた通り、本研究では研究スキル、日本語のアカデミックスキル、日本のある分野に対する理解を深める方法としての修了研究の有効性を示すことができた。

しかし、修了研究として設定する課題の内容もさることながら、カリキュラムにおけるその重みづけやその指導をサポートするカリキュラム設計や実際の指導体制が受け入

れ大学により異なり、全国で行われている日研究生教育に大きな多様性とばらつきが存在することも浮き彫りになった。故に修了研究による質的教育効果の測定は大変困難である。

今後も追跡調査などの方法を取り入れつつ、修了研究の効果をより詳細に明らかにしていきたいと思う。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計7件)

ルチラ パリハワダナ, 鈴木美加, 吉野文, 山本 洋, 「中・上級日本語学習者のアカデミック日本語運用力をめぐる課題—日研究生を対象とした4大学合同日本語テスト結果の分析を基に—」, 『短期型留学プログラムにおける修了研究の教育的意義と有効性』平成26年度報告書, 査読なし, 2015, 5-18

ルチラ パリハワダナ, 「中・上級日本語学習者の学術語彙・論述表現の使用実態と課題—日本語・日本文化研修留学生に対する4大学合同日本語テスト結果の分析を基に—」, 『短期型留学プログラムにおける修了研究の教育的意義と有効性』平成26年度報告書, 査読なし, 2015, 19-32

ルチラ パリハワダナ, 森 眞理子, 「日研究生教育における課題研究の位置付けと役割—『2011年度日本政府(文部科学省)奨学金留学生日本語・日本文化研修留学生コースガイド』の分析を基に—」, 『京都大学国際交流センター論叢』, 査読有, 2号, 2012, 91-112
<http://hdl.handle.net/2433/154809>

(学会発表)(計2件)

ルチラ パリハワダナ, 鈴木美加, 吉野文, 山本 洋, 「中・上級日本語学習者のアカデミック日本語運用力をめぐる課題—日研究生を対象とした4大学合同日本語テスト結果の分析を基に—」, 2014年度日本語教育学会第6回研究集会, 24-27

ルチラ パリハワダナ, 「上級日本語学習者のアカデミック日本語力養成のツールとしての修了研究—日研究生に対する聞き取り調査及び全国アンケート調査を基に—」, 2012年度日本語教育学会研究集会—第10回—予稿集, 84-87

(図書)(小冊子:計4件)

ルチラ パリハワダナ, 『短期型留学プ

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

ルチラ パリハワダナ

(Ruchira, PALIHAWADANA)

京都大学・国際交流推進機構・教授

研究者番号：50303318

(2) 研究分担者

森 真理子 (MORI, Mariko)

京都大学・国際交流推進機構・教授

研究者番号：30230080

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

五味政信 (GOMI, Masanobu)

吉野 文 (YOSHINO, Aya)

鈴木美加 (SUZUKI, Mika)

山本 洋 (YAMAMOTO, Hiroshi)

浮葉正親 (UKIBA, Masachika)

下橋美和 (SIMOHASHI, Miwa)

中嶋容子 (NAKASHIMA, Yoko)